

## オリンピック・ポスターについて

19世紀末にクーベルタン男爵の発想により始まった近代オリンピック大会は、1896年の第一回アテネ大会より2008年の北京大会まで、戦争による中断はあったものの、世界最大のスポーツ大会として注目を集めてきた。日本は1912年の夏季ストックホルム大会より参加、1948年のロンドン大会と1980年のモスクワ大会以外は継続的に大会に選手を送り込んでいる。

国別対抗となるオリンピックはスポーツ祭典であると同時に国威発揚の場としても機能してきた。開催国は総力を挙げて大会の運営ならびに広報にあたり、メダル獲得とともに大会全体の成功のために全力を尽くした。そのため、オリンピック開催にあたって制作される広報ポスター類は、開催国の成熟した文化芸術を世界に知らしめるメディアともなったのである。開催国は競って国内の名だたる芸術家やデザイナーにポスターの制作を依頼し、オリンピックの意義を広く周知させるとともに、国の芸術力をアピールした。

それゆえオリンピックのポスターは、グラフィック・デザインの展開に大きな役割を果たしてきたと同時に、その当時の世相やオリンピックあるいはスポーツの捉え方の変遷も見せてくれる。

ドロワがデザインした1924年パリ大会のポスターでは、風にたなびくトリコロールを背景に、挙手をした半裸の男性たちが並ぶ。その姿は、近代オリンピックが始まって30年弱のこの時代においては、依然として古代オリンピックが規範的イメージとして残存していたことを物語っている。また、



第8回パリ大会ポスター AN2679-22

線描による陰影で浮かび上がる筋肉は、今日のような技術優先のスポーツではなく、肉体の鍛錬のみを頼りにスポーツに挑むアスリートたちの姿勢を表している。

1936年のベルリン大会ポスターはフランツ・ヴェルベルのデザイン。五輪のマークをバックにして月桂冠を頭に挙手する半裸の男性像は、パリ大会の延長にあるが、特徴的なのは前景に四頭立て馬車クアドリカに乗る勝利の女神

の像が描かれていることである。これはおそらくプロイセンの凱旋門であるブランデンブルク門であろう。平和の門であったブランデンブルク門はナポレオンによるベルリン占領以降、戦勝と凱旋のシンボルとなった。この勝利の女神はそれゆえ、スポーツ競技における勝利だけではなく、ナチスドイツが牽引した世界戦争へと向かう時代の空気を明瞭に示している。

オリンピックのポスターは一大会一種が通例であった。そのポスターデザインが大きな転換を迎えるのが1964年の東京大会である。東京大会のデザイナー兼アート・ディレクターであっ

た亀倉雄策が、その後のオリンピック・ポスターの方向性を決定づける革新的デザインを持ち込んだのである。亀倉は、日の丸と五輪とロゴを組み合わせさせた公式ポスター（ロゴデザインは原弘）をベースとして、競技のストップモーション写真を使った連作ポスターを制作、オリンピック・ポスターの古典的名作を生み出した。撮影ディレクターは村越襄、撮影は早坂治であった。高速カメラで捉えられた陸上短距離のスタートの一瞬、あるいはバタフライ泳者が水面から跳ね

上がり水しぶきが舞う一瞬。写真撮影技術と写真製版技術の進歩が亀倉のデザインセンスと融合し、躍動する肉体の動き、まさに運動をポスター上に再現することに成功した。

私たちはスポーツを観戦する際に静止した選手を眼に捉えることはできない。しかし、このポスターの登場以降、私たちはスポーツ競技のうちの一瞬の中に何が生じているかイメージすることができるようになった。その意味で、このポスターデザインは、私たちの知覚の在り方を変容させるものであったのだ。

ドロワやヴェルベルのポスターと比較して東京大会のポスターを見ると、その図案からも時代の変化が伺える。パリ大会、ベルリン大会とも描かれているのは白人男性である。一方、東京大会のポスターには黒人もアジア人も等しく登場している。20世紀前半のオリンピックは世界大会であっても欧米諸国だけが開催する大会であった。アジア初のオリンピック大会、というよりは欧米以外の国で初開催される大会であった東

京オリンピックでは、欧米以外の諸国の参加の広がりや真の意味での世界大会への変化が意識されていたのであろう。

東京大会におけるポスターデザインの展開を受けて、それ以降各国のデザイナーや芸術家が大会ごとにシリーズでデザインを行うようになり、オリンピック・ポスターは飛躍的に拡大していくことになった。東京大会のときに亀倉が就任したアート・ディレクターという立場は、ますますオリンピック運営において重要な役割を果たすようになり、ポス

ター等のグラフィックにとどまらず、大会全体のアート・ディレクションを行うようになってきている。

最後に1998年の冬季長野大会のポスターデザインに触れておこう。いくつかの公式ポスターのうち、青葉益輝がデザインしたポスターには、選手の姿はない。選手の代わりにポスターの中央にいるのは、朝焼けか夕焼けか日の光に照らされる日本アルプスを背景に、スキーストックに



第11回ベルリン大会ポスター AN2694-41

とまる小鳥である。スキーストックが冬季大会であることを告げているが、中心となっているのは自然である。デザインを通して環境問題に取り組んできた青葉ならではのデザインであるが、人間の営為よりも自然との共生を前面に出したこのポスターは、地球環境に敏感になった20世紀末以降の世相を反映しているとも言える。

ここまで見てきたように、オリンピックのポスターは、当時の最先端のデザインを示していると同時に、時代の鏡でもあるのである。

美術工芸資料館は以下の大会の公式ポスターを収蔵している。

第8回パリ大会(1924年)、第11回ベルリン大会(1936年)、第15回ヘルシンキ大会(1952年)、オスロ冬季大会(1952年)、第17回ローマ大会(1960年)、第18回東京大会(1964年)、第19回メキシコ大会(1968年)、札幌冬季大会(1972年)、インスブルック冬季大会(1976年)、長野冬季大会(1998年)。

美術工芸資料館 平芳幸浩